ゴイシシジミは一度目にしたなら、なるほどとその和名命名が納得できる特異な碁石様斑紋をもつかわいいシジミチョウだが、このチョウに会いたいからあそこに行こう、と簡単にいえるチョウではない。筆者自身、初めてゴイシシジミを見たのがどこで、いつのことだったか明確には思い出せない地味なチョウで、予期しないところで不意に出会ってしまう、そういうチョウだ。チョウの幼虫はほとんど例外なく植物の葉や花を食べて育つが、ゴイシシジミは例外の筆頭であって、幼虫がなんと純肉食性なのだ。といえば一体何を食うのか、と首をかしげることになるのだが、タケやササ類に寄生するタケノアブラムシ類を食べることが分かっている。そのせいで、ゴイシシジミに出会える場所にはたいがいタケやササが繁っており、それにはタケアブラムシ類が寄生しているということになる。

Aug. 28, 2004：開田高原

月夜沢林道へと踏み込んで、両脇にクマザサが繁る環境になると、とたんに複数頭のゴイシシジミが黒と白とを交互にちらつかせる、いわゆるフラッシュ飛翔を展開してくれた。純白に碁石模様が目立つ裏面とちがって翅表は短調な淡黒色だが、飛んでいるときには光線の反射具合で薄ムラサキ色を帯びてみえることもある。また、♀では前翅に白い斑点模様があって、これがなかなか美しい。開田高原林道では、クマザサ葉上でまさに♀がＶ字開翅状態をとる場面をカメラに納めることができている。

ゴイシシジミ以外に幼虫が純肉食性であるものとして、ゴマシジミとオオゴマシジミというシジミチョウがクシケアリの卵や幼虫を食べて育つことが知られている。一方、純肉食性ではなくて通常は植物の葉を食べるのだが、場合によっては幼虫同士で共食いをするというケースが、例えばギフチョウ、ジャコウアゲハ、クモマツマキチョウなどで観察されている。後者の場合は、自然界に食エサとしての植物が少ないために、同種間で生き抜かねばならない生存競争そのものであって、あの可憐で美しいクモマツマキチョウが幼虫時代にそのような獰猛な食性で生き抜いた姿であるとは考えたくないけれども、現実はそのように厳しいものだ。八重山諸島でもヤエヤマムラサキの幼虫で共食いが観察されているが、この場合も母蝶が一度に 300-500 もの産卵をして幼虫がほとんど終令期まで群生することから、ときにはけっこう大きなオオイワガネの木であっても葉っぱがほぼ丸裸状態となることがあって、共食いによって種を保とうとする本能が働くのであろう。

July 17, 2016：群馬県湯の丸高原。

Copyright© 2009- Soft House JUMP. All rights reserved.

朝 6 時前、雨が降る気配がないので山道を登ってみると、路傍に多い笹竹周りにゴイシシジミの姿を多く見る。わずかに翅表がのぞける個体は前翅白斑の面積が広い♀だが、その全てがみえるような開翅姿勢をとってはくれない。ゴイシシジミが多い理由は、辺りの笹竹にタケアブラムシの類が群生していることで納得。

Oct. 4, 2019：高砂市曽根町

両側が竹林となった小道沿いでゴイシシジミを観察。撮影記録をとり、もしかしたら高砂市での初記録かもしれないと記録用の 1♂を捕獲。「兵庫県の蝶」（2007）の共著者である近藤伸一さんに確認すると、やはり初記録だと驚かれる。日本のチョウの中では唯一純肉食性で、幼虫がア

ブラムシを食べるゴイシジミミが、最近ではシカ害（笹類は主食の一つ）が拡大し、観察できる地域が激減しているとのことで、貴重な生息地となりそう。

翌日の 10 月 5 日に再訪問し、幼虫が食べるというタケツノアブラムシかササコフキツノアブラムシを探したがまったく見つけられず、笹の葉裏にアリがたかる部分が数か所見られたため、何か関連があるかもしれないとその記録だけをとっておいた。

May 1,2,9；June 23, 2020

第一化の発生時期とされる 2020 年 5 月と 6 月 23 日に同じ場所を探して回ったが、ゴイシシジミとの再会は果たせていなく、想像以上の広範囲な移動をすることもあると聞くので、2019 年の 10 月は偶然どこからか飛来した個体を観察できたということかもしれない。引き続き、10 月まで調査観察をしてみる。

Copyright© 2009- Soft House JUMP. All rights reserved.